慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	クロパトキンの史観
Sub Title	
Author	田中, 萃一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.4 (1915. 4) ,p.377(13)- 388(24)
JaLC DOI	10.14991/001.19150401-0013
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19150401-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

れ、從て其の價格の高低は直にこれ等のものゝ利害休戚に至大の關係を有するものは需要供給の自然の理法に由りて其價格を定めしむべきものにして、人爲的に之が調節を謀るが如きは害こそあれ決して益なきものなり。若し夫れ其國の商業機關にしてよく需要供給を反映することゝ能はざる場合にはこれ其の機關の組織等の不完全なるが爲にして之を改善してよく其目的を達せしむるこそ却て穀價の合理的ならしむる所以にして國家のなすべき所之を措いて他あらざるなり。

クロパトキンの史觀

田中萃一郎

倫敦の近郊に優々餘生を樂める露國の虚無主義者クロパトキン公は曾て一九〇二年に於てMutual Aidの一書を著はして反個人主義の思潮を皷吹したり。この書は目するに普通の史籍を以てす可からずと雖も、過去の制度を解剖して社會生活の變遷を闡明せるが故に、帝王將相の傳記を控除して他に何物をも剩さざるが如き從來の史籍の缺點を補ひ得可きものあり。英國新進の評論家ホルブルック・ジャクスン氏の如きこの書に現はれたるクロパトキンの史觀を以て民主的に歴史を解釋し得たるものなりとし、是を基礎として政治上の新理想を確定し得可しと推稱せり。クロパトキンの史觀に果してかゝる價値ありや否やを論斷せんとせば、先づその所說を稽査せざる可からざるなり。

一

クロパトキンの所説に雷同するものは曰く『Mutual Aid の社會史に對する關係は恰かもダーウィンの種源論の博物學に對するが如し。ダーウィンの末流は師説を謬り傳へて生存競爭の學説を偏狹なるものたらしめしより、クロパトキンは即ち敢てダーウィンの爲に論辯したるなり』と。クロパトキンは即ち本書に於てダーウィンの末流を難じて左の如く云へり。

『ダーウィンの學徒は師の諷示に啓發さるることなく即ち生存競爭の學説を擴充せずして却て益々之を偏狹たらしめたり。ハーバート・スペンサーは密接に之と關係せるも而も全く獨立せる研究の順序を辿りて問題の範圍を擴張して最適者は果して誰ぞと問ひ之に對して解答を與へんと試みしも、無數のダーウィン學徒は生存競爭の概念を最も狹義に解するに至れり。ダーウィンの末流は即ち動物界とは飢餓に瀕せる個體が互ひに他を屠りて甘心せんとして永久に格鬪するの世界なりと説けり。近代の文學は之が影響を受けて喊聲高く哀れなる戰敗者よと絶叫し、之を以て近代生物學の最後の判決なるかの如く説けり。かくて私利私慾を遂げんとする個體の無情なる確執は、忽にして生物學上の原則として崇敬せられ、人類は相互の呑噬を基礎とするものなればこの原則を遵守するにあらずんば滅亡を免るゝ能はずと説けり。經濟學者は元來通俗の著述より自然科學に就て斷片的知識を得るに過ぎざれば固より之を責むるに足らざれど、ダーウィン學徒中の最も有力なる代表者が全力を傾倒してこの誤れる思想を主張することは吾人の輕々に看過し難き點なり』

クロパトキンが『互助論』Mutual Aid を撰みしはこの誤れる思想を論駁せんが爲にして、博物學幷に社會史研究の結果、豐富なる例證を擧げて、個體の鬪爭と相並んで獸群、部族、國民等の團體の鬪爭行はるゝことを指摘し、而して團體の間に成立せる同業組合都市等互助を主義とせる社會上の制度は、人類の天才に依て工夫せる一大發明にして、是に依て以て人類終局の救濟を圖り得可しと爲せり。クロパトキンは先づ動物界に就て種屬永續の上に於て互助が明々白々たる現象たるのみか個體の鬪爭よりも更に重要なるものなることを論證せんとして下の如く云へり。

『吾人若し動物を研究するに方りて實驗室又は博物館の小天地に跼蹐せずして、森林に原野に曠野に峻嶺に之を實査せば、吾人は直ちに各種の動物の間には絶ねず他を剿滅せずんば已まざるの意氣を以て鬪爭の行はるゝことを目擊し得可きも、之と同時に同一種屬に屬する動物、少くも同一社會に屬する動物の間には相互の援助相互の救助相互の防禦の更に數ば行はるゝことを看取し得可きなり。社交性は鬪爭性と同じく天則に基けり。勿論數字を擧げて鬪爭に關する事實と互助に關する事實とその何れが多きやを定むるは假令概算としても極めて困難ならん。而も間接の證明方法を用ゐて最適者は果して何れぞ、絶えず互に戰ふものか、將た又互ひに援助するものかと問はば、吾人は直ちに互助の習慣を養ひたる動物の疑もなく最適者なることを發見す可きなり、蓋しこの種の動物は生存の機會多きが故に隨て同種屬のうちにありてその知識に於てその體力に於て至高の發達を遂げ得可きなり』。

クロパトキンが生物界に於て發見せるこの原則は生物界を通じて往く所として行はれざるはなく、遂に歐洲中古史上近世史上若くば日本支那史上に於ける社會制度として燦爛たる光彩を放つに至れり、彼の暗黑時代と貶稱さるゝ中古の歐洲に於て基督教會同業組合都市その他學問藝術科學商業等に關する各般の組合を支配したるは共に等しくこの互助主義にして、刻下この主義が社會全體を支配せんとするの勢を有するに至りしことは既に讀者の感知さるゝ處ならん。

二

クロパトキンは更に動物界より一歩を進めて野蠻未開の人類の間にも亦互助主義の行はるゝことを説き、世人の所信に反して互助主義の却て蠻人の生命を保護せるものなることを明にせり、その言に曰く

『家族は太古の組織の形式にあらずして極めて後世の人類進化の産物たり。古生人種學（ペレオエスノロジー）の教ゆる所に從へば太古の人類は高等哺乳動物と同じく社會的團聚を成して生活し、一夫多婦制にせよ一夫一婦制にせよ兎に角家族の萠芽發生に先ち極めて徐々たる長年月の進化を遂げしものなること疑ふ可からず。故に人類太古の祖先の原始的組織は社會又は團體にして家族にあらず、是れ實に人種學が愼重なる研鑽に依りて初めて得たるの結論なり。而してその結論は動物

學者の豫想し得たる處と異ならず。高等動物を見よ若干の肉食獸幷に明かに退化しつゝある猿猴の別種即ち猩々大猩猩（ゴリラ）を除くときは一も孤立して森林中に彷徨し小家族を組成して生活するものあるなきなり。即ち爾餘の動物はすべて社會を構成して生活す』

クロパトキンの列擧せる實例を引證せんことは管々しければ議論の要點を摘出するに即ち右の如し。而してクロパトキンは更に論歩を一轉して蠻人の間に存在する村團が共有地に對する配分權を各自に保證し又共同耕作、相互救助、暴力抵抗は勿論知德の進歩民族思想振興の爲に相結合せることを證明して左の如く云へり。

『古代の民族は例として共同に狩獵し共同に漁獵し共同に果樹園を耕作し共同に果樹を栽培したり。共同の農業は蠻人の村團に於ける通則と爲れり。勿論、直接に是を立證し得可き證言は乏しくして、西洋上古の書籍に於ては僅かにヂオドロスの著書にケルト・イベリア種族の一なるリバリ島人に關する記事あり、又ユリウス・ケーサルの史記にスエーヴ人に關する記事あるのみ。然れども フランク人等の若干のチュートン種族幷に古代の蘇格蘭人、愛爾蘭人、威爾斯人等の間に共同農業の行れしことを證明し得可き證據は敢て存せざるにあらず。其習慣の後世に痕跡を遺せるものに至ては實に屈指に遑あらず。全然羅馬化されたる佛國に在りても約二十有五年前までブルターニュ州のモルビアン地方に於て共同耕作は慣例として行はれたり。古代の威爾斯の cyvar 即ち數頭の牛馬を聯ねて耕作するの制度幷に寺區教會所屬の田園を共同に耕作するの制度は、文明の影響最も乏しきカウカサス地方の部族にも普通に行はれ又同一の事實は日常露國農民の間に行はる』

社會進化のこの局面は即ち人類をして野蠻の狀態を脱却せしめ、結局現時の如き社會組織の下に立たしめたる所以のものなり。然共もクロパトキンの說明に從へば過去の團體思想は有力なる利己的の個人家族幷に階級に壓倒され、而して曾て少數を妨げて多數壓抑を行はしめざらんが爲に設けたる制度は却て少數の利益を擁護するの機關となれるなり。

但しクロパトキンの『互助論』のうち最も興味あるは歐洲中古の都市を論評せ

る數章なり。互助主義が人性固有の思想に基き、古今東西何れの時に於ても小家族の互に孤立して生存の爲に鬪爭するものなきを立證せる後、クロパトキンは社會が各自益々一致提携して相互の幸福を圖らんと努力するものなることを說けり。

思ふに西歐史上に於ける中古時代の都會こそは史上に現れたる互助の最も完全なる實例ならめ。中古の時代は從來暗黑時代として貶稱されしか、クロパトキンは當時の社會を描寫して實に左の如き嘆美の言を述べたり。

『自由自治平和の保證は中古都市の主たる目的にして、勞働は之が主たる基礎たりき。然れども中古の經濟學者は生產にのみ注意の全部を傾倒することを爲さず、その實際的思想は能く生產に功を收めんとせば先づ消費の保證されざる可からざることを會得せり。故に各都市に於ては富者と云はず貧民と云はず先づ之に食物と住宅とを供給するを以てその根本の主義と爲せり。かくて食料品その他生活の必要品をその市場に到らざるに先ちて買收し又は他をして之を購求し難からしめんとして有利なる條件を提供することは全く禁止され、商品はすべて先づ市場に之を齎らして何人にても之を購ひ得る樣提供せざる可からず、而して鐸鈴の聲と共に市場の閉鎖さるゝに及びて小賣商人は初めて殘品を購入するを得可し、故にその利益たるや正直なる利益に過ぎざるなり。』

かくてクロパトキンは消費者保護に關する法規と中古都市の基礎たる大同業組合に於ける商品生產保護に關する規約とを列擧したり。中古の都市とは即ち町內區內等の地方的團體を爲して合同せる戶主と、誓約して同業組合を組織せる個人との聯合團體なりき。地方的團體は古代村團の遺制にして、同業組合は新なる產業の發達せる自然の成果なりき。

最後にクロパトキンは近代の中央集權制の國家に於て往古の互助主義の衰頽せる事情を詳述せしが、將來に於てはその復活す可きことを期待し、之を以て人類進步の一大要素なりと認めて左の如く說けり。

『之を要するに、中央集權制國家の壓倒的權力も將た又科學の權威を假りて哲學者社會學者を懼伏せしめたる相互憎惡反噬の學說も、共に未だ以て人心の根底に宿れる人類共同一致の感情を一掃し去ること能はざるなり。蓋しこの感情たるや多年の進化によりて培養せられたるものなればなり。相互援助救助の必

要は近來狹隘なる家族の範圍若くば裏店社會、村落、勞働者の秘密結社等に於て僅かに餘命を保つことゝなりしも、今や近代の社會に於て再び唱道せられ而して過去に於て常に然りしが如く將來の進歩の上に於ける主要なる嚮導たるの權利を要求せんとす』

三

余輩は曾てサンヂカリズムの主張を研究して深く論者が社會の性質を誤解せることを思へり。人聚て社會を構成す、その互に相倚り相助けざる可からざるは理の當然なり。而してその所謂社會なるもの惟り國家のうちに止まらず廣く人類社會と合致するの觀を呈することあり。故に佛教に於ても四恩の一として一切衆生の恩を說けり。然るに個人の自覺は究極する處個人の自負となり、隨て勞働者をして餘剩價値は悉く是れ勞働者の所得に歸す可きものなりとの謬見を抱かしむるに至れり。サンヂカリズムの主張も亦その個人主義的なるの點に於ては毫も社會主義と異るなし。故に余輩は社會の性質互助的なることを極力主張してサンヂカリズムの偏頗なる個人主義なることを悟了せしむるの必要を感じたり。果して然らば余輩は直ちにクロパトキンの互助主義に贊成す可きやと云ふに、成程互助主義は個人主義に對抗して唱道せられたるものなれば、現時の社會に於ける思想上の缺陷を補塡し得可きが如くなれど、決して然らず。日本の如き封建時代の昔より互助主義の有識社會を風靡したる國家は勿論、英國の如きも近十年來は互助主義に基ける社會政策着々として實行せられたれば今日に於ては再び個人主義を以て之が弊害を矯正せざるを得ず。世の農業經濟を論ずるものゝ如き日本の地主を以て獨逸のユンカー、英國のランドロードと同一視し之を以て利己の外何物をも思はざるものとし、所謂飜譯的學說を以て地主と農民若くば農業勞働者との利害の相違を說けども農村に居住せる地主は悉く是れ互助主義を體得せるもの、寧ろ之に向て大に利己主義を鼓吹するの必要あり。蓋し互助主義も亦盾の一面に過ぎず、個人主義と相俟て初めて活氣ある向上的社會の根抵を構成し得可し。換言すれば互助主義に於て我が義務如何と考一考し更に個人主義に於て我が權利如何と沈思一番せずんば到底完全なる個人としての生存を遂ぐると能はざるなり。若し夫れ互助主義の基礎に立ちて各自互ひに權利を主張せんか、社會主義サンヂカリ

ズムの理想實現さる可きも、人類は茲に腐敗の極に達す可し。實に互助主義とは即ち依賴主義にして弱者は强者に向て對等の權利を主張するに至る可く、是れ決して健全なる社會の狀態なりと云ふ可からず。故に余輩は社會その物の性質は互助的なりと信ずと雖も、倫理上に於ては飽くまで獨立思想個人主義を鼓吹するの必要を認むるもの隨て互助主義の史觀を以て政治上の新理想を立てんとするの有害無益なるを思はずんばあらず。

地代と價格との關係（上）

高城仙次郎

目次

一、緒言
二、種々の學說
（A）スミスの說
（B）リカードの說
（C）ミルの說
（D）マーシヤルの說
（E）ミーガーの說
（F）セリグマンの說
三、一　私見
第一節　序言
第二節　利潤とは何ぞや
第三節　靜的狀態の下に於ける地代
對價格の關係
第四節　動的狀態の下に於ける地代
對價格の關係
第一目　地代の變動と價格
第二目　價格の騰貴と地代
第三目　價格の下落と地代
第五節　結言

一　緒言